



なばり

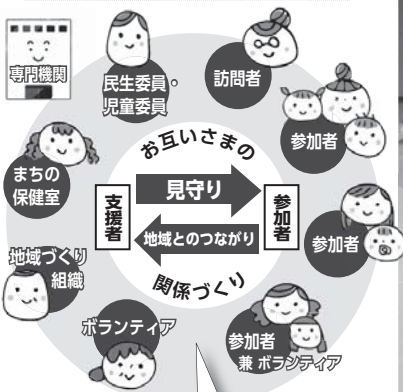
2020年(令和2年) 10月10日発行

主な内容

- 1~6... 特集 コロナを超えて、つながるまちへ。
- 7... 施設ご利用ガイド(11月)
- 8... 11月の相談、観阿弥祭

発行/名張市秘書広報室 〒518-0492 名張市鴻之台1-1 ☎0595-63-7402 FAX 0595-64-2560 ✉pr@city.nabari.mie.jp

「子育てサロン」にみるつながりの輪



子育てサロンは、「支援者が参加者を見守る」だけでなく、参加者同士で悩みを話し合ったり、支援者同士で情報交換したりと、地域の人がつながり、お互いが元気になる場。時には、近所の高齢者が子どもと触れ合ったり、参加者が運営に加わったりすることも。特に心配な参加者がいれば、専門機関につないでいます。



6月に再開された鴻之台・希央台地域の子育てサロン。地域の人がつながり、支え合う場として重要な役割を担っている。左がまちの保健室の三永さん、中央が参加者の佐々木さん、右が運営ボランティアの久保田さん

がんばろう! つなごう!
WE LOVE なばり

特集

コロナを超えて、つながるまちへ。

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、身体的な距離をとることが求められ、地域の交流が困難に。改めて、人々との「つながり」を意識した人も多いのではないだろうか。かつてない経験を共有している私たち。一歩ずつ「日常」を取り戻そうとしている今、「つながる」ことの大切さを考えます。

外出自粛時、次々にイベントや集まりが中止に...

今年3月、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、小・中学校が臨時休業。不要不急の外出自粛や密閉・密集・密接の回避など、人と人との身体的接触を極力減らすことが求められ、次々にイベントや集まりが中止されました。

鴻之台・希央台地域の子育てサロン「さらさらひろば」でも、3月以降開催を中止。「準備しては中止になることが繰り返され、参加者の皆さんのことが気がかりな日々でした」と話すのは、運営ボランティアの久保田繁美さん。「サロンが開かれず、運営ボランティアの皆さんも少し気落ちしている様子でした」と、まちの保健室の三永拓子さんは振り返ります。

そんな中、サロンのために準備していたひなまつりのあられ、実に60人分をどうするかという新たな課題が浮上。人を集めて配ることが難しいため、鴻之台の通称「か

人と人との「つながり」を再認識するとき

今年2・3月に、市が実施した市民意識調査で、「隣近所との付き合いや交流がある」とした市民の割合は64・3%と、前年比6・2ポイントの減。平成17年の調査以来、最も低い値となりました。

一方、6月に実施された国の調査では、4割の人が「社会とのつながりの重要性を、より意識するようになった」としています。外出自粛により人と人の交流が難しくなったことで、「つながる」ことの大切さが見直されています。

感染拡大前 비해、
社会とのつながりの重要性を、より意識するようになった人の割合

39.3%

内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」令和2年6月

2ページ以降へ続く



「まちの保健室」って? 介護や子育てなどの不安や悩みを気軽に相談できる窓口で、市内15地域に設置。看護師や社会福祉士などの専門職を配置し、地域の皆さんとともに健康教室やサロンも実施しています。 ☎ 地域包括支援センター ☎ 63-7833



「今こそ、地域のために」と、地域に広がったマスクづくり

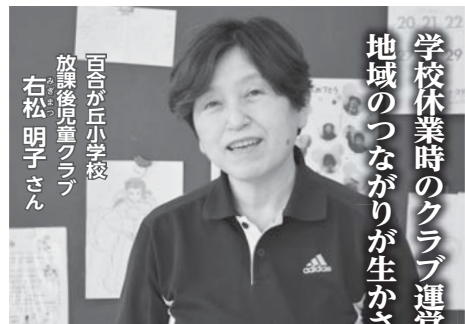
市民センターが3月に臨時休館になり、地域の活動やセンターの行事も中止。「こんな時こそ何かできることはないかな」と考えていました。ちょうどその頃、いただいた手作りマスクがヒントになって「地域のみんなでマスクを作って、手に入らなくて困っている人に届けよう」と思ったのです。

マスク作りは、市民センターやまちの保健室の職員のほか、縫製が得意そうな地域の人にも協力を仰ぎ、10人も女性が快く引き受けてくれました。当時は材料も品薄でしたが、「地域のために」という思いを聞いて、なんとか入手しようとしてくれる事業者もいました。「地域は違うが、手伝いたい」というサークル活動のメンバーや、独自に手作りしたマスクをセンターに持参いただいた人もいました。こうして、仕上がったマスクは実に400枚。4月下旬以降、民生委員・児童委員さんの協力で、ひとり暮らしの高齢者などに届けたり、「大切にしてください」と書いた手紙を添えて小学生に渡したりしました。ある高齢者からは、「私は地域に生かされています。ありがとうございます」といったお礼の手紙も頂戴しました。

得意の趣味や経験などを生かして地域や学校のためにお手伝いする人が増えていくと、もっと暮らしやすいまちになるはず。今後は、マスクづくりで芽生えた人のつながりを広げて、地域で助け合える仕組みづくりに取り組んでいきたいですね。



材料の調達から縫製、配布にいたるまで、マスクづくりの輪が地域に広がっていった。



学校休業時のクラブ運営には、地域のつながりが生かされた

全国一斉に小学校が臨時休業になるとの情報が2月末に入りました。それに合わせていつでも放課後児童クラブを開所できるよう、すぐに、スタッフのシフトを組む準備を始めました。

これまで、台風などの緊急時にクラブを急ぎょ開設することもあり、「医療従事者などフルタイム勤務の保護者が多く、休暇を取得しにくい」といった事情を、みんなで共有していました。そのため、比較的スムーズに、午前中からのクラブ開所に対応できたのだと思います。

子どもたちが密集しないよう利用者数を制限した際、保護者には、休暇を取得できたり、祖父母に預けられたりする場合は利用を控えていただくよう依頼。「より困っている人を優先しよう」と、快く引き受けていただきました。地域の人や保護者から、マスクや消毒液なども寄贈いただき、本当に助かっています。

実は、百合が丘地区では、学習支援ボランティアの「ほめほめ隊」など、普段から地域の皆さんが子どもを地域の宝として大切に見守り支援する活動が行われていて、多くの地域の人やボランティアがクラブに携わっていただいています。こうした普段からのつながりや協力があつたからこそ、困難な状況においても継続してクラブを運営できているのだと感謝しています。



「おやつを食べ終わったらマスクをしようね」と指導員。机の配置を変えて対面を避けるなど、感染防止を徹底

瞬く間の感染拡大。その時、私は動いた。

特集

コロナを超えて、つながるまちへ。

WE LOVE なばり

瞬く間の感染拡大。その時、私は動いた。

今年に入り、瞬く間に感染が拡大。暮らしが一変し、未知のウイルスに対する不安も広がっていききました。こうした中、「いま、自分にできることは何か」と考え、行動に移した人たちがいます。



ひとり親家庭などに食料品を配布。支援のつながりに感謝

私たちが運営する「なばりこども食堂」は、平成28年、やなせ宿を拠点にスタート。いつも一人でご飯を食べている子、スナック菓子で食事を済ませる子、経済的な理由から満足に食べられない親子…。名張でもこのような子どもたちが大勢います。こども食堂で食事をする時間を通して、子どもたちや保護者がちょっとだけ楽になれる、悩みを相談できる、そんな居場所を目指して活動しています。

しかし、コロナ禍で「集まって食べる」ことが難しくなり、3月から7月までは休止することに。こうした中、実施したのが食料品無料配布会でした。寄附いただいたレトルト食品や缶詰、菓子類などを詰め合わせて、ひとり親家庭など生活に困っている親子に配布。5月に2回、8・9月に1回ずつ実施し、毎回20世帯ほどに利用いただいています。

「コロナ禍で困っている人のために」と、初めて寄附をされる人や、「こども食堂応援マーケット」を開き、その売上げを寄附いただいたり、特別定額給付金を寄附いただいたりもしました。また、市内飲食店のテイクアウト情報をまとめたチラシを、デザイン会社に無料で作成いただき、利用者に配ることができました。こうした支援のつながりに感謝しています。

こども食堂は、農家や企業をはじめ皆さんからの支援で成り立っています。活動を継続していくために、今後もご支援いただけたらありがたいですね。



無料で食事が提供されるこども食堂。温かい雰囲気の中、ボランティアなどと触れ合い、心を育む場にもなっている



普段から見守っている人がいる。そのつながりを途絶えさせない

民生委員・児童委員には、ひとり暮らし高齢者や障害者など、普段から見守っている人がいます。外出自粛の中でも、「このつながりを途絶えさせてはならない」と、詐欺防止のチラシを配ったり、定額給付金の申請を支援したりしながら、継続して見守り対象のお宅を訪問。まちの保健室なども連携して、皆さんの状況を確認していました。全市的な詳しい状況把握はこれからですが、私の地区では、顔を見るなり、せきを切ったようにたくさん話してくれる人もいました。一人ひとりに寄り添った支援は、普段からの関係づくりによって成り立っています。

私は、地域のさまざまな活動にも関わっています。「大変だな」と言われますが、地域全体での見守り活動が大切で、何より、「人のために」と思っていてくると、自分の年齢も忘れちゃうんですよ。

赤目地域で移動や家事などの支援を行う「あんしんねと赤目」には、地区の民生委員・児童委員10人を含め、25人が協力員として活動しています。3月に休止したところ、「病院や買い物に行けなくなり困った」という声が続々と寄せられました。そこで、利用人数を制限して4月に再開。すごく喜ばれました。私たち自身も「こんなにも必要とされていたのか」と感じ、「もっと頑張らなあかん」と思ったのです。「ありがとう」の言葉がみんなの気持ちを温めてくれているのかもしれないですね。



一人ひとりと顔が見える関係を築きながら、困難な事例があれば、まちの保健室などにつなげて対応していく



寄せられた数多くの「善意」

- ▶「いま、自分たちができることを」と、市民や事業所、地域、各種団体の皆さんから、数多くの「善意」をお寄せいただいています。
- ▶感染拡大の収束を願って寄贈された虎のタペストリーや銅板が、市役所の来庁者を力強く見守っています。
- ▶「ひやわん」が、マスク着用などを訴えるハンカチやポスターを保育園などに配布。子どもたちも大喜び。
- ▶「なばり愛のマスクバンクプロジェクト」で皆さんから寄せられた余剰マスクは実に3,101枚。名張青年会議所からも、皆さんから寄せられた170枚のマスクをお預かりしました。
- ▶市立病院のスタッフに心温まる夜食をいただいたり、救急車に設置するオゾン発生装置を寄贈いただいたりと、医療関係者へも多くの支援をいただきました。
- ▶マスクや消毒液、フェイスシールドなど、ここに掲載しきれない数多くの寄贈品は、市立病院などの医療機関、福祉施設、教育機関などで大切に使用されています。ありがとうございます！

寄贈品は市ホームページに掲載しています。

新型コロナウイルス感染拡大と主な動き (全国的な動きは太字)

9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	令和2年1月
19日	31日	20日	7日	3日	15日	8日	1日	6日
市が、イベントや会合などの基準(人数上限・収容率など)を緩和	県が緊急警戒宣言を解除	市PCR検査センター開設	国内で1日の感染者確認数1605人と過去最多	県が緊急警戒宣言	市内で感染者(7月と8月で計7例の感染を確認)	市内第2弾スタート	市内の取扱店では使えるプレミアム食券利用開始	「中国で原因不明の肺炎発生」と厚生労働省が注意喚起
								国内初の感染者
								厚生労働省対策推進本部を立ち上げ
								県内初の感染者
								市主催のイベントの開催基準を策定(不特定多数の人が参加のイベントは中止・延期を決定)
								首相が全国の小・中学校、高校、特別支援学校に臨時休業を要請
								市体育施設(屋内)の受付・利用中止
								市文化施設などを臨時休館
								市内小・中学校を臨時休業
								伊賀保健所管内で感染者
								市新型コロナウイルス対策本部設置
								市公共施設を臨時休館
								東京オリンピック・パラリンピックの延期を決定
								新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づく新型コロナウイルス感染症対策本部を設置
								新型コロナウイルス感染症対策本部を設置
								市公共施設を開館
								市内小・中学校新学期開始
								7都府県に緊急事態宣言
								政府が108兆円規模の経済対策を実施すると表明
								県が感染拡大防止緊急宣言
								緊急事態宣言全国に拡大
								国内の感染者、累計1万人を超える(横浜市のクラスター、市内小・中学校を臨時休業、市公共施設を臨時休館)
								緊急事態宣言5月31日まで延長
								新型コロナウイルス対策専門家会議から、新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例が示される
								8都府県は継続
								市が特別定額給付金申請書を全市帯に向けて郵送
								緊急事態宣言を全解除
								市内小・中学校半日再開
								市内小・中学校完全再開
								市公共施設開館(一部施設は5月25日順次開館)
								市が余剰マスク提供の受付開始(なばり愛のマスクバンクプロジェクト/7月末まで)
								国の2次補正予算(31.9兆円)成立
								なばり観光応援キャンペーン第1弾スタート
								市内の取扱店では使えるプレミアム食券利用開始
								なばり観光応援キャンペーン第2弾スタート
								市内で感染者(7月と8月で計7例の感染を確認)
								県が緊急警戒宣言
								国内で1日の感染者確認数1605人と過去最多
								市PCR検査センター開設
								県が緊急警戒宣言を解除
								市が、イベントや会合などの基準(人数上限・収容率など)を緩和

その時、何が起っていたのか



絶対に感染者を出さない!そんな強い思いで、組合員が一丸に。ぶどう作りへの情熱は途切れない

青蓮寺湖ぶどう組合 榎本 健司さん(組合長/写真左) 雪岡 理道さん(写真右)

状況が動いたのは、緊急事態宣言が解除された5月下旬。県から感染対策を行いながら経済活動を実施する場合の考え方が示され、ぶどう組合でも独自の感染対策ガイドラインを作成することを決めました。榎本さんは、「ぶどうを作っても流通経路がなく、不安もありましたが、手洗い、はさみやざるの消毒、客が密



密集を避けるため、手洗い場を増設したぶどう園

1月頃は、まだ他人事のように思ってたよ」と話すのは青蓮寺湖ぶどう組合の榎本さん。1月5日に「いちご狩り」を開園したものの、2月頃から団体客からのキャンセルが相次ぎ、4月上旬、自主的に休園。ぶどう組合設立50周年を記念した式典も延期することに。その頃、祖父の代から続くぶどう栽培に、今年から本格的に携わるようになった雪岡さんも、「ぶどう狩りのお客さんは確実に減るだろうから、今年は、素晴らしいぶどうを作れるように専念しよう」と考えていました。

集しない動線、注意喚起看板の設置など、感染防止対策についてオープン直前まで、組合員全員で何度も話し合いました。そして、お客さんからも組合員からも絶対に感染者を出さないという強い思いを組合員が共有し、一丸となって取り組んできました」と当時を振り返ります。



近隣の観光地を訪れる「マイクロツーリズム」が注目される中、今年は、初めて来園したという市民の姿も多く見られた

観光ぶどう園には、お客さんとの出会いがある。直接「おいしい」と言ってもらえるのが、何よりの報酬なんです。SNSで私たちのぶどう作りへの思いに触れ、お越しいただく人も増えてきました。お客さんに食べてもらって喜んでもらうことを念頭に、祖父や父がたないできた農園で最高のぶどうを作りたい」と雪岡さん。観光ぶどう狩りが始まって半世紀。ぶどう作りにかける農家の情熱は、次の世代へとしっかりと引き継がれています。



昨年4月に、赤目四十八滝キャンプ場を公設民営化。以来、地元青年有志でつくる(一社)滝川YOR I A Iが管理運営を担う。移住希望者と地元住民が集える催し(左写真)が開催されるなど、「人が集える拠点」としてさまざまな取組が展開されている。

今回の企画は、運営当初から何かと支援いただいている地域の皆さんの協力があったからこそ」と重森さん。赤目まちづくり委員会会長の亀本和文さんは「地元の若い世代が頑張ってくれているので心強い。世代間で地域活性化への思いを共有しながら、できるだけバックアップしていきたい」と話します。「今後、大学とも連携して事業を継続していくことで、地域課題のフィードバックはもちろん、観光客や移住者をはじめさまざまな人をより柔軟に受け入れていける地域にしていきたい。新しいつながりが、地域活性化に向けた化学反応に結び付くはず」と重森さん。地域内外、老若男女でつながりながら、明日を見据えた活動が始まっています。

WE LOVE なばり

特集

思いをつないで、明日へ。

外出自粛を背景に、市や商工会議所には、飲食や観光関連の事業者などから「事業が成り立たない」といった悲痛な声が寄せられていました。こうした中、人の思いをつなぎながら、苦境の先にある未来に向けて歩みを進めている事業者がいます。



コロナを超えて、つながるまちへ。



市内8店舗が弁当を共同販売し、評判に(5月)

自身のお店が大変な時にも関わらず、市内飲食店の危機を救いたい、目の前で頭を下げられました。新聞販売店にはバイクや車がそろっていて事業を始めやすい。ただ、それよりも、玖村さんの責任感や男気に感じ入った、その場で引き受けさせていだいたんです」と話すのは、新聞販売店の伊集さん。

実は、二人とも移住者で、「名張の人に、とにかく温かく受け入れてもらった。だから名張が大好きだし、名張の発展に尽くしたい」と口をそろえます。「接点のなかった人たちが、コロナ禍で助け合い、つながりが、今後もこのつながりが生きてくるはず」と玖村さん。名張への熱い思いが、つながること、苦境打開の扉が少しずつ開かれています。

外出自粛の影響で経営が悪化。名張への熱い思いで、異業種がつながり、苦境打開の扉を開く

名張商工会議所青年部会長 玖村 健史さん(写真右) 新聞販売店 代表取締役 伊集 基之さん(写真左)

そこで、弁当販売をスタート。売上も好調だったため、他店にも声をかけた玖村さん。看板料理を組み合わせた弁当を作ったり、弁当を共同販売したりして、集客力を

代行できる仕組みを検討し始めます。しかし、保健や運輸関係の規制は厳しく、事業化の糸口が見つかりません。「弁当販売ができません。ピンチはクイズ。必ず答えにたどり着けると信じて模索し続けました」と玖村さん。そんな時、新聞販売店に以前代行を頼んでみてはどうかと提案がありました。

販売店の伊集さん。このやり取りから3カ月後の8月に、登録飲食店の出前メニューを配達するサービスを開始。伊集さんは、「困っている飲食店のためにも、できるだけ早く始めたかった。それに、外出困難な高齢者や身体障害者からの注文も多く、とても喜んでいただいています」と話します。



7年前、私の経営する飲食店が火事になり、近隣のカフェ仲間や取引先、お客さんなどいろんな人に、営業復帰に向けて助けていただきました。今、その恩返しができる」と話すのは、名張商工会議所青年部会長の玖村さん。自身の経営する飲食店でも、外出自粛の影響で3月は売上が半減。4月は2割以下に落ち込んだそうです。

高めていきました。玖村さんは「飲食店を応援しよう」と、お客さんが毎日通ってくれるんです。すごかりがたかった。それに、同じ状況に置かれている者同士が、つながること、心強く感じました」と振り返ります。



現在、登録飲食店は11店舗。前日までに電話やネットで出前を注文(市内の一部エリア外)。外出困難な人にも好評だ

コロナ収束後に向けて取り組んでいるのは、人と人がつながる地域にするための仕掛けづくり

(一社)滝川YOR I A I 代表理事 重森 洋志さん



人が集える拠点として、赤目四十八滝キャンプ場を活用していきたい」と話すのは、赤目四十八滝キャンプ場の(一社)滝川YOR I A Iの重森さん。4月に休業し、施設補修などに取り組みました。再開は6月。新築したバンガローと場内Wi-Fiを活用したテレワーク応援プランを考案。「このプランにより、新しくなったキャンプ場を、市民の皆さんも含めてたくさんの人に知ってもらえた。コロナ禍の中でも、できることはたくさんある」と重森さん。そして、コロナ収束後に向けて新たに企画したのが、「大学生4人が1週間キャンプ場に住み込み、錦生・赤目地域の魅力を再発見する」という試みでした。



◆キャンプ場に住み込み、地域の魅力発見を試みた大学生(前列中央の女性4人)の発表会に地元の方々と移住定住を進めるメンバー、市職員などが集まった(9月)。

蔵持地区のまちの保健室前で開催されているラジオ体操。体温測定や参加者名簿作成など感染防止対策も徹底。隣接する保育園の園児が出席印を押ししたり、井戸端会議が始まったりと、地域の人の笑顔があふれる場となっている。



5月に緊急事態宣言が解除され、いち早く活動が再開された蔵持地域のラジオ体操。蔵持地区まちの保健室と蔵持市民センターが共催し、週に3回、15人ほどが集まります。「住民の皆さんからの要望もあつたので、感染防止対策を徹底して再開することにしました。皆さん生き生きしていますよ」と、まちの保健室の村上理恵さん。いつもラジオ体操を楽しみにしている小山美恵子さんは「屋外なので、なんとか再開できないかとまちの保健室に相談したんです。急に、集まれなくなつて、心細くなつていましたから。ここは、みんなと顔を合わせてほつとできる場所。心の拠り所になつてほしいですね」と話します。

コロナ禍に立ち向かい、取り戻そうとつづける「日常」とはー

コロナ禍に立ち向かい、取り戻そうとつづける「日常」とはー

今日も誰かをつながってる



普段からのつながり大切に



地域包括支援センター 上田 紀子

まちの保健室は、地域の皆さんと連携し、一人ひとりと顔の見える信頼関係を築いていこうとしています。普段の様子が分かると、予防的な支援も可能となります。

外出自粛時、まちの保健室には、電話などで「感染が不安」「心細い」といった相談が寄せられました。何かあった時、人と話をすることで心が楽になることがあります。見守りが必要な人もそうでない人も、普段から地域でのつながりを大切にしてください。近隣で頼る人がいない人も、まずはあなたの地域の「まちの保健室」にご相談ください。

特集 / コロナを超えて、つながるまちへ。

市では、「支え手」「受け手」という関係を超えて、人がつながり、互いに支え合う「地域共生社会」の実現に向けた取組を進めてきました。子育て支援、介護予防、生活援助、防災・防犯などさまざまな分野での「住民自らが考え、自ら行う」取組は、昨年12月に市内を視察したWHO(世界保健機関)からも高く評価され、コロナ禍においても、地域で築かれてきた「つながり」が生かされています。

「地域共生社会」を一步前へ

コロナ禍に立ち向かい、取り戻そうとつづける「日常」は、人と人の「つながり」を大切にしながら、日々築き上げてきた「かけがえない日常」にほかなりません。



桔梗が丘地区 まちの保健室職員

傷を受ける事態も起きています。誰もがいつ感染するかもしれない状況の中、互いを思いやりながら、感染防止に取り組み、ウイルスを封じ込めていく。そして、もし、自分が感染しても、温かく見守られながら、治療に専念できる。そんな社会が求められています。同じように、いずれ自分が認知症になるかもしれないし、突然、身体が不自由になるかもしれない。地域住民がつながりながら、困ったときには手を差し伸べられるまちを築いていくことは、誰にとっても必要なことなのです。

コロナ禍が長期化しています。感染者を疎外したり、「つながり」というライフラインを途絶えさせたりするのはなく、「つながる」ことの大切さを見つめ直し、私たちが築いてきた「地域共生社会」を、さらに一步前へと進めていくようではありませんか。

傷を受ける事態も起きています。誰もがいつ感染するかもしれない状況の中、互いを思いやりながら、感染防止に取り組み、ウイルスを封じ込めていく。そして、もし、自分が感染しても、温かく見守られながら、治療に専念できる。そんな社会が求められています。同じように、いずれ自分が認知症になるかもしれないし、突然、身体が不自由になるかもしれない。地域住民がつながりながら、困ったときには手を差し伸べられるまちを築いていくことは、誰にとっても必要なことなのです。

人は人との関係の中でこそ生きていける。コロナを正しく恐れながら、前進しよう



同志社大学 社会学部 教授 永田 祐 さん

名張市などをフィールドに地域福祉や包括的な支援体制について研究。名張市地域福祉計画策定委員会会長

地域で、だれもが安心して暮らしていくことを目指す「地域福祉」の原点は、人と人が顔を合わせてつながり、支え合うこと。人は人との関係の中でこそ生きていけるのです。コロナ禍でその「つながり」が否定されることは、想定外の出来事でした。それに、新型コロナウイルス感染症は、当初、影響力や対処方法など、未知の部分が大きく、恐怖が前面に出て、他人をおもんばかりに難しい状況だったかと思えます。

感染拡大に伴い、全国的に地域の活動は大きく縮小しました。しかし、全ての人当事者ですから、災害時のように一致団結しやすく、「自分ごと」として、その不安や困りごとを共有しやすい状況だとも言えます。感染予防を前提とした「新しい生活様式」が示され、緊急事態宣言が解除される中、地域で助け合い支え合う活動は、徐々に再開されています。

こうした中、名張市では2つの強みを発揮できたのではないかと感じています。一つは、孤立したり、ストレスを抱えたりした人が身近に相談できる場所があること。そしてもう一つは、専門職と地域の人とがともに地域づくりを行ってきた素地があるということ。つながりの中で、地域の人々の力が生かされています。

その一方で、普段から地域とつながりがなかった人や、困っていると声を出せないでいる人は、コロナ禍の中、ますます孤立してしまっているはず。これまで続けてきた地域の行事や活動を、「コロナ禍だから」と、安易に中止してしまうのではなく、感染防止対策をしながら、何か工夫できないか、状況に応じて取り組めないかを改めて考えてみてください。新型コロナウイルスを正しく恐れながら、「地域福祉」の歩みを止めない。今は、そんなステージに入っているのだと思います。



【市民活動における感染防止の基本的な考え方(市ガイドライン)】 詳しくは、市ホームページに掲載しています。

- ①発熱者などの施設への入場防止、参加者名簿の作成 ②密閉・密集・密接の防止、マスク着用 ③手洗い、手指消毒の徹底